

## その 52

### そして今、万葉を世界に (その 2)



万葉のふるさと奈良、大和の国へ、東京をマイカーで旅立った。東名高速道を 1 時間も走るか走らないうちに、富士山の麓をひた走ることになる。大和の国に至る間、数多ある万葉歌に関わる地に立ち寄るつもりは毛頭ないが、富士山だけは別である。いやも応もなく、万葉故地富士山をかすめて走ることになるからである。そこを通り過ぎるのにかなりの時間がかかることになるが、その間、万葉集に詠われた富士山の歌が思い浮かばないわけがない。万葉集には、富士山を詠んだ歌が 11 首ある。そのうち何首かは、これまでに取り上げ紹介してきた。最もよく知られているのが、山部宿禰赤人の「不盡山を望める歌」だろう。

「田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺に 雪は降りける」 (巻 3・318)

この日の天気は、まだ梅雨の真っ盛りで、雨は降ってはいないが、広大な富士の裾野から上は厚い雲に覆われ、歌に詠われた「富士の高嶺」を見ることができない。しかし、私の場合、富士山頂を見ることができない失望感、見逃した無念の度合い(?)は、他の人に比べると、かなり低いものと思われる。なぜなら、若い時には毎日のように富士の頂を見て暮らしていたからである。というのは、私、生まれ育ちが甲州で、甲府のわが家から、毎日のように、山々の上に聳え立つその山頂を見ていた。さらに父の生家は、富士の麓、逆さ富士で知られる当時の河口村(現在、富士河口湖町)にあり、よく里帰りをしては、壮大な富士の景観を楽しんでいた。今も父から残された畑地が、富士と河口湖を真正面に望む位置にあり、ここから見る富士山が日本一、という地元愛に溢れた一人だ。

ところが残念なことに、万葉集の中の富士の歌 11 首の中には、このように美しい、思わず歌に詠みたくなるような富士の絶景を、甲州の側から詠んだ歌がないのである。甲斐の国が詠み込まれた歌はあるが、甲斐の国から詠んだ歌ではない。次の高橋虫麻呂の長歌である。

「なまよみの甲斐の国 うち寄する駿河の国と ちごちの国のみ中ゆ 出で立てる 富士の高嶺は 天雲もい行きはばかり 飛ぶ鳥も飛びも上らず (中略) 日の本の大和の国の鎮めとも います神かも 宝ともなれる山かも 駿河なる富士の高嶺は 見れど飽かぬかも」

「なまよみの」は甲斐の国の枕詞で、生黄泉或いは半黄泉の意とされ、「甲斐」は峽、貝、交ひ等の諸説があるが、もっとも有力な説は「現生と黄泉の国が交差する国」ということのようなだ。「うち寄する」は「波打ち寄する」駿河の国の枕詞で、末尾の「する」の音と「するが(駿河)」にかけている。

確かに歌は「甲斐の国」から始まっているが、歌の終わりを見ても分かるように、「駿河の国」から見た歌と

なっている。ただ、霊峰富士の歌 11 首は、いずれも東海道から詠まれたものとされている中で、1 首だけ、甲斐の国の「鳴沢」村を詠ったのでは、とされる歌がある。鳴沢村は、わが富士河口湖町の隣村である。

「さ寝<sup>ぬ</sup>らくは 玉の緒ばかり 恋<sup>こ</sup>ふらくは 富士の高嶺の 鳴沢の如」 作者未詳（巻 14・3358）

（寝することは玉の紐ほどに短く、別れて恋しいことは富士の鳴沢のように激しいことよ）

歌に詠まれた鳴沢は、大沢崩れで知られる富士宮市の放射谷大沢とされているが、万葉学者中西進氏等は、一説として富士山には数百もの放射谷があり、山梨県鳴沢村が、歌に詠まれた鳴沢であるとしても、あながち間違いではないということから、鳴沢村総合センターの一面には、この歌の歌碑が建てられている。



しかし、この歌を含めた歌群に書かれた左注には、「右の五首は、駿河国の歌」となっているので、富士宮市の大沢崩れの可能性が高いということだろう。

それでは、万葉集には、富士山以外に、甲斐の国山梨で詠まれた歌があるのか、ということになる。それが、残念ながら、ない。「万葉集」には、武蔵国など東国 12 カ国で詠まれた東歌等が 300 首以上あるが、その中に甲斐国は含まれていない。また、佐賀県の中原遺跡<sup>なかぼる</sup>から出土した木簡の中から、甲斐国の人防人としてこの地に来ていたことを示す資料が発見されたことから、甲斐国からも防人として九州へ赴いた人々がいたのは確かだ。しかし、100 首近くある防人の歌の中に、甲斐国の防人の歌はない。当時の東海道と東山道の峡<sup>かい</sup>に位置し、奈良の都からは辺境の地といっても過言ではない甲斐の国は、万葉文化とは縁遠かったということだろう。

しかし、このような万葉文化の過疎地、甲斐の国にも、万葉故地に勝るとも劣らない万葉公園がある。かつては、万力林と呼ばれ、山梨市を流れる笛吹川が氾濫しないよう古来堤防としてきた松林一帯のことで、南北朝時代の記録にも「万力」の地名はあるという。その地名の由来は、万人の力を合わせて堅固な堤防を、という願いを込めて付けられたと伝えられている。私たちも、小中学校の時甲府から足をのばして、川と松林の他には何も無い万力林に、遠足で遊びに行ったものだった。

その万力林が、今や「万葉の森」に変身していることを知った。平成 5 年、「万力公園・万葉の森」として新たに開園したのである。万力公園から北へ 1 キロほどのところに、古来「歌枕」として知られる「差出の磯」があったことがきっかけだった。これは、険しい岩塊が川に突き出している、つまり、「差し出て」いることから、「差出の磯」と詠まれたもので、山国でありながら海岸の磯のように見える景観を詠ったもの。ただし、万葉集には詠われたことはなく、初出は、平安時代の古今和歌集である。次の賀歌である。

「しほの山 差出の磯に すむ千鳥 君が御代をば 八千代とぞなく」

詠み人知らず（古今和歌集 巻 7・345）

それ以来歌の名所ともいう歌枕として、多くの歌人によって詠い継がれ、その歌の数は 30 首を超えている。また、万力公園がある山梨市の隣町は、平成 17 年の市町村合併で甲州市と変わったが、かつては塩山<sup>えんざん</sup>

市で、現在も町名や JR の駅名として「塩山」が残っている。その塩山の一画にポツンと立つお椀型の山が、町の名前の由来となった「塩ノ山」で、町のシンボルともなっている。海のない山国に塩の山？……と誰しも思うところだが、その通りで、「差出の磯」の歌の枕詞「しほの山」から来たものとされている。そして、この「しほの山」の意は、「塩の山」ではなく、「四方から見える山」、つまり、「しほうの山」が「しほの山」となったもの。麓からの高さは約 150 メートルで、和歌から生まれたことから、甲府盆地の大和三山の 1 つに例えられることもあるようだ。

ちなみに、古今和歌集 巻 7・345「差出の磯」の 3 つ前の歌、つまり、巻 7・342 番の歌をご覧ください。

「わが君は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで」

詠み人知らず（古今和歌集 巻 7・342）

私たちの誰でも知っている歌、いや、誰もが歌っている歌である。「わが君は」を、「君が代は」に入れ替えると、日本国歌である。

こうして、近くに歌枕「差出の磯」があり、また、万力林には、万葉集に詠われた植物 110 余種が自生していたことから、「万力」を「万葉」にかけたのでもあろう、「万葉の森」という新しい名がつけられた。そして、万葉植物や四季折々咲き乱れる花々の傍らには、その歌に因んだ歌碑が、全部で 27 基、中には万葉学者の犬養孝氏や中西進氏揮毫による歌碑も建てられ、「万力林」は、見事に「万力公園・万葉の森」に生まれ変わったのである。



万力公園・万葉の森

そして、コロナ禍で現在は中止となっているが、毎年蛍が飛ぶシーズンには、万葉衣装をまとう万葉歌を歌う万葉歌朗誦の会や、小中高生から一般の部まで和歌を公募する短歌大会など等、万葉まつりとして各種イベントも行われている。

こうして万葉文化の過疎地甲斐の国に、万葉故地にも引けを取らない、見事な万葉公園ができあがった。都の文化から隔絶した辺境の地にも、万葉の文化、そして、歌枕「差出の磯」や「塩ノ山」の物語が息づいていたのである。

奈良への旅の途中、他に立ち寄るつもりはない、とは書いたが、実は、今回の旅は万葉の森にあるような万葉歌碑がテーマの 1 つであり、また、万葉集に詠まれた大和三山を見渡すのが目的の 1 つなのだから、まんざら無駄な寄り道、というわけではない。いずれにしても、万葉世界とは無縁の地に生まれ育ちながら、万葉集に関わったものにとっては、万葉のふるさと大和の国は憧れの地であり、奈良への旅は秘かに胸躍らせるものがある。

先を急ごう。奈良への旅の途中、ぜひとも会いたい人がいた。アイルランド出身の日本文学者、ピーター・マクミラン氏である。マクミラン氏は、現在京都で、「日本文化を世界に広める」をモットーに、翻訳や出版、コンテンツ制作の会社「月の舟」の代表取締役である。現在朝日新聞に、「星の林に～ピーター・マクミランの

「詩歌翻遊」を連載中なので、その名をご存じの方は多いだろう。

「月の舟」と「星の林に」と聞けば、あの万葉秀歌を思い起こす人は多い。

「<sup>あめ</sup>天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ」 柿本人麻呂歌集（巻 7・1068）

マクミラン氏は、この歌を次のように英訳している。

Cloud waves rise  
in the sea of heaven.  
The moon is a boat  
that rows till it hides  
in a wood of stars.

この英訳と解説は、マクミラン氏が、万葉集由来の新元号令和となった 2019 年 12 月、文春新書『英語で味わう万葉集』として出版したもので、「日本文学の原点『万葉集』から選りすぐった 100 首に美しい英訳」等を付けた、その内の 1 首である。



マイカーで約 7 時間。高速道の渋滞もあり、約束の時間に 30 分遅れて、京都二条城近くの喫茶店に駆けつけた時、待ちぼうけを食わされたマクミラン氏は、優しい笑顔とユーモアで迎えてくれた。忙しい社長業の間、40 分だけ時間を空けてもらったのだが、残された時間は 10～20 分しかない。ありがたいことに、依頼しておいた関連の資料は、すでにメールで送ってくれており、基本的なポイントだけ確認して別れざるを得なかったが、短い時間にもかかわらず、マクミラン氏の万葉集にかかる思いとその明るく柔らかな人柄を知ることができたのは何よりの収穫だった。

私が尋ねたのは、マクミラン氏の「月の舟」の基本コンセプトである「日本文化を世界に広める」、とりわけ、「万葉集を世界に広める」ことへの思いとその具体的な方策だった。そこで、当日のお話といただいた資料などで、その答えをまとめてみた。

マクミラン氏は、令和という「新しい時代の日本にとって、『万葉集』はどのような意味を持つのだろうか」と、『英語で味わう万葉集』に書いている。そして、「もし日本の文学が素晴らしいものであるなら、なぜもっと注目を集めていないのでしょうか？」という疑問に対して、マクミラン氏は答える。「万葉集の世界的な注目が低いのは、優れた訳詞がこれまで少なかったからだろう」。

そして、それを解決する具体的な方策として、次の 2 つの事業に着手したことを話してくれた。

その 1 つは、高岡万葉歴史館とともに始めた、万葉歌碑に歌とその解説、それに英語の訳を付けた解説板を設置するという「万葉歌碑魅力発信プロジェクト」である。万力公園で見たような万葉歌碑は、全国各地に約 2300 基あるとされるが、その多くは長年雨風に打たれ歌碑の碑文そのものが読みづらくなっている。

時には万葉仮名の原文で書かれただけの歌碑もあり、それらに、日本語と英語で、訳と解説を付けようというのだ。確かに日本語の歌を読んでもその意味が分からない万葉秀歌は多いが、英語で書かれた訳を読むと分かる、ということも間々ある。このプロジェクトは日本観光振興協会の地域ブランド開発推進事業に選定され、このほどマクミラン氏は高岡市の歌碑 26 基分の原稿を仕上げ、高岡万葉文化館に提出したという。その中から 1 首、日本語による読み下し文とその英訳、英文による解説を、次に紹介する。

かたかごよ  
堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

「ものものふの <sup>やそをとめ</sup>八十娘子らが 汲みまがふ 寺井の上の 堅香子の花」 大伴家持（巻 19・4143）

So many lovely maidens  
gathering to draw water,  
and around the temple well  
dogtooth violets  
blossoming here and there.



This is poem number 4143 of the *Man'yōshū*, the oldest existing collection of poetry in Japan. The *Man'yōshū* consists of over 4,500 poems and was compiled over a period of around 130 years, from the first part of the 7<sup>th</sup> century to the latter part of the 8<sup>th</sup> century. The author of this poem is Ōtomo no Yakamochi.

This poem depicts lovely maidens gathering water from a well amid a field of dogtooth violets. It was composed by the poet while picking these flowers and is the only poem in the *Man'yōshū* that mentions dogtooth violets. The way in which the young ladies scattered in a group are overlapping with the flowers scattered here and there conveys Yakamochi's exquisite sense of beauty.

Book 19 of the *Man'yōshū* begins with twelve poems composed between the 1<sup>st</sup> and the 3<sup>rd</sup> day of the third month, 750. These poems are known as “Etchū Shūgin” (Splendid Poems of Etchū) and are some of the most highly regarded poems from Yakamochi's time in Etchū. This is the fifth poem in that series.

英語が苦手な私にもどうにか読みこなせる分かりやすい英語である。そもそも万葉の時代の「堅香子」は、現代では「カタクリ」。では、英語では、何と呼ぶ……それが、「dogtooth violets」とは、思いがけなかった。最初は、「ええ？ 犬の歯？」と、歯をむき出しにした犬をイメージして驚いたが、辞書を引くと、「犬歯スマイル」、「カタクリ」である。なるほど、英米人は、あの可憐な花を、「犬歯」、つまり、可愛らしい「糸切り歯」と見たてたのか。美しい花を「犬の歯」と呼ぶ他国のことを言える立場ではない。なぜなら、わが国には、「犬のふぐり（陰囊）」と呼ぶ野草がある。犬にとっては不愉快なのか、嬉しいのかわからないが、カタクリやスマイルと同じ頃咲く美しい青色の野花である。その写真の横に、こんな句があった。「犬ふぐり スマイルに名だけ 負けにけり」。

そう言えば、万葉仮名で、「喚犬」と書いてマ、「犬馬」でマソ、「三犬女」でミヌメ、と読ませているが、「犬齒董」と書いて、カタクリと読むのも、万葉らしくていいかもしれない。

また、英文の解説の中の「*Man'yōshū*」という英語表記を見ると、生前親しくしていた国語学者の金田一春彦先生が、昭和 31 年の『文芸春秋』に書いた「万葉集の謎は英語でも解ける」というエッセーが思い起こされる。金田一先生は、万葉集を「*Man-yo-shew*」と表記した上で、次のように読み解いている。

〈*Man-yo-shew* の区切り方を、*Many-o-shew* とする。と、*Many* は言うまでもなく「たくさん」、そして、*o* は *ode* (頌歌、抒情詩) の略語、*shew* は *show* の古語で、*Many-o-shew* の意は、「たくさんの抒情詩のショー(陳列)」なり。つまり、「万葉集」なのです〉 (『万葉集ナウ』その 42)

当時万葉集をいろんな外国語で読み解ける、という風潮を皮肉って戯れに書いたようだが、さすが金田一先生、日本語だけではなく、英語も詳しかった(マクミランさん、この英語の読み解きは、いかが?)。いずれにしても、万葉集には、先に書いた「犬馬(マソ)」等、戯書と呼ばれる表記があるが、その遊び心を受け継いだエッセーといってもいいだろう。

そして、もう 1 つ、マクミラン氏取り組み始めた事業が、万葉集全 4516 首の英語による全訳である。

マクミラン氏が言う通り、「万葉集の世界的な知名度が低いのは、優れた訳詞がこれまで少なかったからだろう」。では、万葉集の全訳の現況はどうか。これまで、万葉集全 20 巻を英訳したものはあるのだろうか。

明治学院大学元教授ワトソン・マイケル氏の論文「万葉集の英訳について」によると、「万葉英訳の歴史は、明治時代のお雇い外国人チエンバレンの時代からであるので、意外に長い」という。チエンバレンは、明治 24 (1891) 年、万葉歌 68 首を英訳、出版している。では、全訳は、というと「1929 年から 63 年にかけて、オランダ人学者ピアソン、その後、1967 年と 1991 年、日本人による全英訳」がされているという。すでに 3 点も完訳があることは意外だったが、そのいずれも満足できるような質ではないようで、マイケル氏は、「海外の万葉を専門とする研究者による全訳を待ち受けているというのが正直なところである」という。

そこで、マクミラン氏の出番となる。氏は言う。「万葉集全訳は、国家レベルの大きなプロジェクト。全訳するには 10 年はかかる。多数の専門の研究者や編集者とチームを組まなければならないので、必要な資金は莫大だ。万葉集の魅力を発信し続けることで多くの人の協力を募りたい」。

現在は、予算が許す範囲で作業を進めているが、クラウドファンディングで費用を集めることなども検討している、という。

そこで、最後にマクミラン氏に「万葉集を世界遺産に登録する運動についてはどう思うか?」と問うた。

「それについては、今動いてはいない。しかし、声がかかれば、全面的な協力をしたい」という。

最初の万葉歌碑の解説板の設置は言うまでもなく、万葉集全訳や世界遺産登録の活動は、全国的な観光や地方創生の視点からの財政的な支援も含め、地域、とりわけ万葉故地と連携していくことが肝要だろう。マクミラン氏が書いているように、「『万葉集』が、日本の文学史における宝物というだけでなく、世界的にも重要な文学作品として認知されるようになることを願っている」。その思いは、自称「万葉集宣伝係」が

志向してきた方向と軌を一にするものだが、そのいずれのプロジェクトも、10年、或いは、それ以上かかるという大事業ではある。

次の打ち合わせに向かうマクミラン氏を慌ただしくお送りした後、久しぶりに車で京都市内を一回りし、夜遅くになって、奈良は橿原市のホテルに入った。神武天皇が即位されたという伝承が残る橿原。夜が明けると、畝傍山、天香具山、耳成山からなる大和三山の優美な姿を見ることができるはずだ。

明日からは、これら三山を含め、これまで見るができなかったものを見、立つことができなかつた地に立つ、そんな万葉最後の旅が始まる。

高岡市の「万葉歌碑魅力発信プロジェクト」の続報が報じられた。

7月15日、高岡市万葉歴史館において、万葉歌碑の英訳付き解説板のお披露目式が行われた。各紙その模様を報じているが、中日新聞からその一部を引用して紹介する。

## 万葉歌碑の 英訳解説板 高岡市内に 12カ所新設

歌碑の前に設置した解説板の  
除幕式

坂本信幸館長（左）

ピーター・マクミランさん（右）

＝高岡市万葉歴史館で



日本観光振興協会（東京都）が進める地域ブランド開発のモデル事業に選定された高岡市の「万葉歌碑魅力発信プロジェクト」の一環で、市内の万葉歌碑12カ所に英訳付きの解説板が新設された。お披露目式が15日、同市万葉歴史館であった。

同市は、万葉集を編さんしたとされる奈良時代の歌人大伴家持が越中国守として赴任した地であり、市内には歌碑が多い。インバウンド（外国人旅行者）も含めて世界に万葉集の魅力やゆかりの地を発信するため英訳を加えた。万葉集などの英訳に取り組むアイルランド出身の日本文学者ピーター・マクミランさんが歌を翻訳。歌碑は、市内52カ所にある。プロジェクトではうち12カ所の11首に解説板を付けた。

お披露目式では、角田悠紀市長、同協会の皆見薫常務理事、監修役の坂本信幸館長、マクミランさんが解説板を除幕した。坂本館長とマクミランさんの講演もあり、坂本館長は「歌碑巡りは日本の文化を巡る旅になる」、マクミランさんは「歌碑がある景観を守り、万葉集を世界に発信する出発点」と語った。